長崎大学大学院教育学研究科
教職実践専攻

平成27年度

教育研究成果報告書

平成28年3月

はじめに

平成26年4月に、長崎大学大学院教育学研究科の教職実践専攻(専門職学位課程：いわゆる教職大学院)と教科実践専攻(修士課程)が教職実践専攻に一本化されて、２年目が終わろうとしている。当初設置されていた４コース(子ども理解・特別支援教育実践コース、学校運営・授業実践開発コース、理科・ICT教育実践コース、国際理解・英語教育実践コース)は、子ども理解・特別支援教育実践コース、学級経営・授業実践開発コース、教科授業実践コースの３コースに再編された。そして、それまで修士課程にまとまっていた教科の専門性に関わる教育研究組織が、教職大学院の中に包含され、学校現場での教育実践に沿う形での教科の専門性向上に軸足を移したと言える。ただ、本年度末の修了生には、旧教職大学院の入学者も含まれているため、一括りに扱うのは難しいところもあるものの、教職大学院のメリットは表出してきている。その一つは教育実習の充実であり、もう一つは教育実践研究の推進である。

教育実習は、教職大学院では10単位が必修であるのに対して、修士課程では2単位の臨床実習のみであった。本報告書には、教職大学院での実習に関する報告が含まれており、教育実習に関する院生の学びの質が見て取れる。また、教育実践研究については、教職大学院では教育実践上の課題解決が前面に出ているのに対して、修士課程では教科の学術的な専門性が前面に出る傾向が見られた。そのため、教職大学院各コースでのクロスセッションや教育実践研究の成果に関する報告がまとめられており、教育実践研究の推進が見て取れる。前述のように、これからの教職大学院では学校現場での教育実践に沿う教科の専門性向上が課題であり、教職大学院としての理論と実践の統合モデルに基づく教科の専門性の向上も取り込んだ、教育実践研究の更なる推進が求められている。

本報告書は、長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻の教育及び研究に関する今年度の成果を総括し、情報発信を兼ねて作成・配布することとした。本専攻における教員養成力の高度化のために、忌憚のないご意見を賜れば幸甚である。

平成28年３月
長崎大学大学院教育学研究科
研究科長　　藤木　卓

目　次

はじめに

学校教育実践実習の概要 …… 1

大学院生による実習の報告

実　習　1 …… 2

実　習　2 …… 4

実　習　3 …… 6

現職教員学生による報告 ……10

実　習　4・5 ……11

教育実践と省察のコミュニティ 2015 ……12

「子どもの学習意欲を高める授業とは」

クロスセッション 2015 ……14

成果発表 ……16

学校教育実践実習の概要

教育実践実習のねらい

学校教育に関する基礎的・理論的な理解の上に、学校の教育活動全般を主体的に経験し、省察すること。また、学級経営、授業実践、生徒指導、教育相談等にかかわる課題や問題に関し、指導教員の指導の下で自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。

構成

- 学校教育実践実習１　（学級経営、生徒指導）
- 学校教育実践実習２　（学級経営、授業実践）
- 学校教育実践実習３　（生徒指導、教育相談）
- 学校教育実践実習４　（各コース実践研究）
- 学校教育実践実習５　（各コース実践研究）

教育実践実習の内容

教職大学院における教育実習では、大学院生が学校の教育活動全般を経験できるように、便宜上、「学校教育実践実習１～３」で行う各実習の中心的な内容を定めている。ただし、「学校教育実践実習１～５」のすべての実習において、大学院生は、主体的にテーマを設定し、実習の計画を作成し、積極的に実習に取り組むことが求められている。

学校教育実践実習１（学級経営・生徒指導）

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、児童・生徒理解に基づく生徒指導等に必要な資質や能力の向上を目指す。

実習内容

学級経営補助や基本的生活習慣づくりの補助など、学級担任教師の活動の観察や補助活動を通して、学級経営の意義と実際について理解を深め、実践できるようにする。また、各教室の掲示物、児童・生徒の座席配置、安全への配慮などを、観察や担任教師からの聞き取り等を通して理解し、実践できるようにする。

また、児童・生徒の行動観察や指導補助を通して、一人ひとりの児童・生徒の個性や集団としての特徴などについて、さらに児童・生徒が学校生活、学級生活に満足感を持ち、楽しい学校生活を作っていくための条件などについて理解を深め、集団づくりやソーシャルスキルを育てるための手だてを修得する。

院生による学校教育実践実習１の報告

泉　セシリア　（子ども理解・特別支援教育実践コース）

実践実習１では、５月から７月にかけて毎週１回、小学校で児童の観察、授業の参観・学習指導を行い、その中で通常学級に在籍している学習面又は行動面で困難を示す児童に対し、担任教師と協働で個別の指導計画を作成した。個別の指導計画対象児童は、長崎市内のＢ小学校第３学年の男児２名とし、児童の実態把握は、授業の参観・学習支援での観察や担任への聞き取り、長崎市教育委員会作成の実態把握チェックリスト（小学校）様式を用いて行った。チェックリストをつける際は、担任にも協力していただき、お互いがつけたチェックリストを見比べ、点数が異なるところは意見を出し合い、お互いが納得する評価点にした。担任教師の協力によって、客観的な実態把握を行うことができた。また、個別の指導計画を作成したことで、対象児への支援方法や関わり方について担任教師と共有することができ、授業での学習支援において様々な支援を行うことができた。

野﨑　徹　（子ども理解・特別支援教育実践コース）

実践実習１では、『小学校高学年における学級経営の実際―新年度における教師と児童、児童相互の人間関係構築方法のための教師の働きかけに焦点を当てて―』といったテーマのもと、小学５年生の学級で実習をさせていただいた。本実習では、教師の取り組みによ

って教師と児童、児童相互の関係構築のための具体的な手立てを考察していくことをねらいとして実施した。方法は、授業の参観・学習支援での観察や担任への聞き取り、Q-U（楽しい学校生活を送るためのアンケート）等を用いて行った。担任は、とにかくクラスに「人を大切にしなさい」と何度も伝えていて、人を大切にしない行為があった場合は厳しく指導をするようにしていた。その継続した指導により、５月に行ったQ-Uでは、学級生活満足群に属している児童が全体の６割を超える結果となった。今後は、よりよい学級にするために担任が無意識に行っている行動や言動に注目して、それを意識化できるようにリストアップしていく。

山本 麟太郎（学級経営・授業実践開発コース）

実習１で、私は、長崎大学教育学部附属小学校３年生に配属された。

学級の子どもたちに初めて出会ったときにどんなことに注意しているかを記述していきたい。私が、実習初日で必ず行うことは、子どもの名字をその日に覚えてしまうということだ。名前は後回しで、とにかく、名字で覚えてしまう。これなら、１時間あれば十分に覚えることができる。そして、名字をある程度覚えたら、名字あてクイズなどを子どもとすると、子どもとのコミュニケーションもとれ、一石二鳥である。次に、学級のルールをとにかく理解するということを心がけている。学級のルールを確認する前に、自分の今までの方法で行動してしまうと、子どもたちと先生の信用を大きく損ねる恐れがある。だから私は、とにかく子どもと先生にこの場合はどうすればよいのかを聞いている。上記の二つは当たり前なのかもしれないが、このようなことをしっかりこなすことが、初めは大切だと感じている。

全　サラ（教科授業実践コース）

実習１では、研究内容に基づいた視点から「学級経営」と「生徒指導」の観察記録を行った。「学級経営」に関しては、学級経営を行う半年間の過程を観察し、記録した。指導の言葉かけや配慮、タイミング、それを行う方法を学級担任やその他の教師の言葉かけを明確に記録し、どの言葉かけが学級経営に影響しているのかを記録した。また「生徒指導」に関しては、教師の言葉かけや配慮に対して、指導を行う前後の児童行動を記録し、教師の言葉かけと照らし合わせることで分析を行った。実習最終日には、研究内容である小１プロブレムに関しての先行資料を把握した上で、児童に向けてのアンケートを実施した。アンケートの回答分析を行い、小１プロブレムの実態の把握を行った。このように、実習１では、小学校低学年における児童の実態や学級経営の内容を観察記録し、その上アンケート回答を記録と重ね合わせることで小１プロブレムの実態の検証実践を実験的に行うことができた。

学校教育実践実習２（学級経営・授業実践）

目標

学校、学年、学級の教育目標を達成するための条件整備の力量を向上させるために、物理的環境整備と人間関係的条件整備に関わる資質や能力の向上を目指す。また、指導計画や学習指導案の作成、授業実践等を通して、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに授業力の一層の向上を目指す。

実習内容

学級経営の計画、学校の組織運営（校務分掌）の在り方について演習を通して理解するとともに、学級づくりのためのソーシャルスキル訓練の実習、討論を通しての話し方・聴き方の育て方等の能力の向上を図る。さらに、学級通信の作成補助などを通して家庭と連携する力量を高める。また、事例研究などを通してＰ（計画）―Ｄ（実施）―Ｃ（評価）―Ａ（改善）のマネジメントサイクルによる実践ができるようにする。

また、教育課程編成の在り方や運営、具体的取組について実践的に学び、年間（単元）指導計画や学習指導案の作成、学習材の開発、及び授業参観や授業補助、授業実践等の活動を通して、教師の日常の活動を学び、教師としての使命感や教育観をより強固に形成するとともに、授業力を一層向上させる。

院生による学校教育実践実習２の報告

黒木　美帆（子ども理解・特別支援教育実践コース）

「特別支援学校における自閉症スペクトラム障害のある生徒の自発的要求行動の形成のための指導・支援法について」という教育実習テーマもと、自閉症スペクトラム障害のある生徒の学校場面におけるコミュニケーション表出の実態把握を行い、その結果、中学部生徒１名において自ら進んで要求を行うことが困難な様子が見られた。そこでその生徒を対象に、行動連鎖が確立している場面の途中で物がない場面を作ったうえで、注意喚起行動（①担任・副担任に近づき、②「先生」と呼ぶ、肩を叩く）を行った後に要求の言葉（③「○○がありません」）がでることを目標とし支援を行った。その結果、ベース期と比較し、②注意喚起と③要求言語行動において自発回数が増え、私自身も支援の方法を学ぶことができた。課題の設定の仕方が観察のみになってしまったことや担任との情報の共有の仕方に課題が見られたため、それらを改善できるよう今後の実習に生かしていきたい。

寺川　愛美　（子ども理解・特別支援教育実践コース）

特別支援学校における自閉症児の社会性の育ちの獲得のための指導・支援が実際にどのように行われているのかについて、中でも、要求言語行動の形成支援に焦点をあて、教師の指導・支援の様子を観察しつつ実践を行った。実習校では、自閉症の児童の要求言語行動の形成をどのように支援しているのか、実際の指導場面を観察し、分析することで明らかにすることを目的とした。1名の児童を対象とし、教師が対象児童に対して行っている機会を利用した具体的な指導・支援等について観察し、随時、作成した記録シートに記録する方法で行った。記録シートの項目については、日付、時間、場面、実際の様子を記録し、その時に思ったことや考えたことをコメントの欄に記入した。分析方法については、この記録シート(一次データ)を読み込み、教師の支援の方法によって4分類した。観察を行った結果、先生方によって、すべての要求場面においてパターンを形成させる方法がとられていることが分かった。

笹本 健太（学級経営・授業実践開発コース）

私は、実習2において、知識構成型ジグソー法を取り入れた授業実践を行った。

私は長崎大学教育学部からのストレートマスターであり、ちょうど 2 年前に長崎大学教育学部附属中において、教育実習の中で授業を行った。その時に実践した授業は、至って普通の授業だったものの、本実習では、知識構成型ジグソー法を取り入れた授業を行った。知識構成型ジグソー法とは、協働学習の一つであり、生徒が主体的に自分の考えを伝達し合う授業であり、生徒が授業の中心にいるものだ。

授業実践を通して、準備を含め、授業を行うのは本当に大変だった。しかし、自分に不足している力や今後の授業を行う上で課題を見つけることができ、よい経験になったと思う。また、ICT を取り入れた授業でもあったため、ICT を使うときの注意点や事前準備の大変さを感じることができ、本当にいろいろなことを学んだ実習であったと思う。

槇　謙太（教科授業実践コース）

実習 2 では 5 時間分の授業で構成されている小単元「アジア州」の授業を 3 クラス分担当させてもらえることになった。そこで私は「急速な成長によってアジアはどのように変化したのだろうか」という問いを、単元を通しての主題として設定し、4 回の授業でアジア州の特徴や課題を「人口」や「農業」といった様々な視点からとらえ、最後の授業でその主題を通して見えたアジア州の特徴を生徒が理解し表現できるような授業を計画した。
実際に授業を行なってみると、自分の想定通りに授業を展開することができないことが多く、2 週間の実習期間で計 15 回もの授業を行なうのは初めての経験だったので、授業をこなすことで精一杯になってしまっていた。しかし、単元を全て自分自身で直接生徒に行なうことで授業の前後のつながりを意識することや、単元を通した課題を設定することで 1 時間の授業だけでは深められない学びを生徒に提供できることを実感できた実習であった。

学校教育実践実習３（生徒指導・教育相談）

目標

児童・生徒理解に基づく生徒指導、教育相談、特別支援教育、キャリア教育等に必要な資質や能力の向上を目指す。また、一人一人の児童生徒のニーズに合った指導・支援についての理解と適切な指導能力を培うことを目指す。

実習内容

児童生徒の持っている力を引き出すために、生徒指導の３機能である「自己存在感を与える」「共感的な人間関係を育成する」「自己決定の場を与える」を適切に位置づけた学級経営や教科指導を計画し実践する。

また、教育相談的視点を生かした集団づくり・授業づくりを計画・実践し、教育上の配慮を必要とする児童生徒への合理的配慮の在り方についても理解し、実践する。

いじめ、不登校等の要因となる指導上の課題を見出し、改善のための具体的方策を考え取り組むなどの実践ができるようにする。

院生による学校教育実践実習３の報告

青山　友里　（子ども理解・特別支援教育実践コース）

実習３では、長崎県立の特別支援学校高等部において教育実践実習を行った。特別支援学校高等部は、卒業後の生活を視野にいれた支援・指導を行っていく。卒業後の進路に違いはあっても、困った場面で他者に助けを求めることができることはQOLの向上に役立つと考えられる。そういった視点のもと、実習３では援助要請行動の促進を目的とした実践研究を行った。研究場面を学校にいる間と定め、まずは生徒の実態の観察・記録を行い、研究対象とする生徒を定めた。その後、毎週の実習の日に対象生徒に支援を行い、研究の評価は対象者の自己表現が変化したかどうかによって、私と学級担任の先生の２人で評価を行った。調査の結果、対象者の自己表現の一部には向上がみられた。支援を行うと徐々に援助要請行動の増加が見られたが、支援がない状態での援助要請行動の変化は断定できない結果であった。実習４、５では、実践研究の検証を進めていきたいと考えている。

松本　歩　（子ども理解・特別支援教育実践コース）

研究テーマは「児童の自立と協働を促す教員の在り方～通学合宿と学校教育を結びつける観点～」である。そのため通学合宿を行っている公立小学校において通学合宿期間中は児童と寝泊まりをしながら４日間連続と毎週火曜日の計１０回、変則的に実習をさせて頂

いた。本実習では①発達段階における自立・協働についての具体的ルーブリックの基準の作成、②通学合宿に参加した児童の変容を調べる、というねらいのもと実施した。①については子どもの育ちの課題が見られたものの、ルーブリックの基準作成までには至らなかった。②については、対象児童が各クラスに分かれており、観察を続けてできなかったことや、通学合宿で身に付けた力が発揮できる場がなかったため、ねらいが達成できなかった。今後の課題としては、通学合宿においての自立の定義づけし、具体的指標を明確にする。それを踏まえて学校教育との結びつけの方法を検討していく。

鈴木 計哉（学級経営・授業実践開発コース）

実習３では、早朝課外から７校時まで１つの学級に入り、生徒の授業態度を記録した。記録は、実習１・２で開発した授業態度記録システムを用いて、実習者が実施した。また、システムで集約した生徒の学習状況を可視化し、授業を担当している教員に提示した．さらに、半構造化面接法によって、授業態度記録の有用性について検討するとともに、教員の意識変化に注目した分析をした．その結果、可視化された情報は教員にとって興味深く、教科横断的な視点で生徒の学習状況を把握できる点で有用性があることが示された．また、「授業態度が良い生徒や悪い生徒だけでなく、何も特徴が出ていない生徒についても、見落とすことなく支援をする必要がある。」などの回答が得られたことから、教員の意識に変化があったと考察した．一方課題として、授業をしながらシステムに入力することが容易でない点や、進路指導などで継続して使用するための新たな仕組みが必要な点などが明らかとなった．

林田 清美（学級経営・授業実践開発コース）

私は、児童が互いの考えをしっかり「聞く」ことのできる道徳授業をテーマに学校教育実践実習３を行った。初めて複式学級配属で実習をしたため、学級の雰囲気に慣れることから始まった。全 10 日間のうち、最初の 8 日間は児童の実態把握と指導案検討を、9 日目は授業実践を、10 日目は授業反省を行った。実習中は、運動会や学習支援の機会もあり、子どもと一緒に活動することができたのは非常に面白かった点である。私が構想した授業では、発問とワークシートによって児童が互いの考えを聞けるようにした。授業実践では、指導案を丁寧に作っていたつもりだったが、実際には、子どもの言葉への応答や考えを全体で共有することなどの手立てが上手くいかず、道徳授業の難しさを痛感。しかし、校長先生や担任の先生に何度もご指導をいただき、反省まで丁寧にできたため、とても貴重な実習になったと思っている。

益田 航平（学級経営・授業実践開発コース）

今年 1 年間実習に行って、教育現場の実際の一端を見ることができたと思う。学部生の頃までは、どちらかというと先生方と子どもとの関わり方や授業の様子を見て、できることは真似をしてみるという形だった。一方で大学院での実習では、授業検討会や職員会議等に出席させていただき、子どもには見えにくい先生方の苦労も知ることができた。週に 1 回の実習の中で、子どもたちとどのように信頼関係を築いていくのかが課題だったが、その分子ども一人一人に深く関わるように心がけた。

また、授業実践も行った。私は、総合的な学習の時間で 3 クラス同時に授業を行ったものの、学年の先生方と意思疎通を図っておくことの大切さを学んだ。授業の中で、グループに分かれて活動をする時間があったが、授業者だけでは対応できない場面で、先生方それぞれが各々の班の指導にあたってくださった。今までは体験できなかった貴重な経験となった。

松永 光曜（学級経営・授業実践開発コース）

実習３は、今までの実習と違い先生方と職員室で関わることが増えた。先生方と過ごす時間が増えることで、教員同士での情報交換がどれだけ大切なことなのか、みんなで楽しく働くということがどれだけ大切なのかなど職員室でしか学べないことも身をもって学ばせていただいた。特に校長先生から「これからは、チーム深掘の一員として頑張って欲しい。」と職員用の学校経営方針のプリントをいただいた時、チームの一員として認められた気がして、何よりも嬉しかった。また、「人として一緒に働きたくなる人間を目指すこと」の大切さをこの時改めて実感し、これからもこの信念を貫いていきたいと思うようになった。

実習３は「子どもたちと関わるだけではなく、先生方と関わることも学びである」と考え方を変え、人として一つ成長させてくれる機会を私に与えてくれた。これからも、実習での経験一つ一つを学びへと転換していく。

行成 功志（学級経営・授業実践開発コース）

実習３では長与町立長与第二中学校で実習を行った。主に第１学年の数学を中心に２二人に先生の授業に参加させていただいた。授業中は主に補助員として教室内を机間巡視し、分からない生徒、困っている生徒に対してサポートを行った。多くの授業を見ることで授業の進め方、生徒との接し方などモデルにすることで自分のスキルアップにつながった。また、生徒と実際に関わることで少しながらその方法を実践することができ、教師として成長することができた。また、研究という視点ではみると二人の数学の授業を見ることで指示や授業の進め方、言動、態度から同じ内容でも生徒の反応、意識が異なっていることに気がついた。大きな違いとしては授業後に各生徒が書く評価カードの有無である。これによって生徒の授業に対する参加意欲が大きくことなることがわかった。このように実習３は研究としてだけでなく、教師としても成長する実習を行うことができた。

中田智大（教科授業実践コース）

学校教育実践実習３では県立高等学校での実習を行い、「自己決定の場」に着目し、生徒が自らの判断や考えを他者にはっきりと示し、伝えるための指導を目指した。

授業実践では、普通科１年生の物理基礎で演示実験を取り入れた授業を設計し、実践を行った。その実践における課題として、授業中の生徒の活動や考えを示す場面の少なさなど、「自己決定の場」が十分に設定できていなかった点を明らかにすることができた。

改善の方策として、「問い」を明確にし、グループなどで生徒が互いの考えを共有していくことで、情報を取捨選択しながら必要なことを吟味したり、判断したり、グループでの考えを全体に向けて発信できるような授業設計が必要と考えた。

また、生徒の授業中の様子や授業後の対話から、自らの考えや判断した理由を他者に伝える際の工夫や意識についてはまだ明確にできていない点もあるため、今後も生徒とのかかわりを通して明らかにしていきたい。

中村　一史（教科授業実践コース）

学校教育実践実習 3 は公立中学校での実習であった。今後の研究のテーマとなり得る課題を発見することを目標とし、授業実践も何度かさせていただきながら、実習校における理科学習の課題を模索した。ある授業実践では、生徒に仮説を立てさせ、その仮説を実験を通して検証するという流れの授業を実践した。しかし生徒の中には、その仮説に対してどのような実験方法を立てどのような結果が得られれば、最初に立てた仮説の検証ができるのかを考えることのできない生徒もいた。これは、全国学力調査からも明らかになっている、長崎県の理科教育の課題のひとつであるともいえ、私の実習校でも同じようなことが言える。今後の研究の視点としては、この長崎県の課題でもある「疑問に対して仮説を立て、それを観察・実験を通して検証する」授業を通して、生徒に科学的な思考力を深めさせていきたい。

本村　洸樹（教科授業実践コース）

４月から９月までの実習で生徒が様々な教科の授業を受ける様子を観察してきたが、観察を行う中で印象的だったのは、授業にあまりついていけていない生徒たちの困った顔であった。そこで、英語に苦手意識を持つ生徒に対する生徒指導というテーマを掲げ、授業で躓いている生徒への英語理解を深める指導について考察を行った。

1 年生を対象にしたアンケートでは、英語の学習を難しく感じる原因として「文法」や「文や文章を書くこと」の 2 つが多く挙げられた他、生徒の自主学習の取り組みの様子を観察していると、英語に対して苦手意識を持っている生徒の多くが自主学習の取り組みに消極的で、スキルの定着が不十分であるようだった。文法指導やライティング指導の工夫に加え、自主学習の習慣を身につけさせることの必要性を感じ、授業実践の際には、音声を中心とした導入や ICT 教材を使った視覚的なサポートを通して文法事項の定着を図った。

現職教員学生による報告

川﨑健太（学級経営・授業実践開発コース）

私は、現職の院生として、2年プログラムの1年目は、長崎市内の県立高校で実習を行った。実習校のご好意により、多くの授業参観、授業実践を行わせていただいた。実習を通して、自身のこれまでの教師生活を振り返ることができ、新しい発見も数多くあった。また、教師としての責任の重さを改めて感じることができた。

研究テーマとして、学習のつまずきに焦点を当てている。教師が生徒をつまずかせないように授業を行うことも重要だが、生徒がつまずくことで学ぶことのほうが、より重要ではないかと考えている。教師がいかに授業を行うかではなく、生徒がどのように学び、何を身につけるのか、資質・能力を養う授業の在り方について考察している。

2年目は勤務校へ戻り、実践と日々の教育活動を両立させながら研究を進めていくことになると思うが、この1年間で学んだことを糧に研鑽していきたいと考えている。

田上左千代（学級経営・授業実践開発コース）

「先生ってどういう人？」ネームプレートを提げてはいたものの、全校生徒に自己紹介をできないまま実習に入った私を見て、生徒たちはいぶかしがった。「実習生＝お姉さん的な存在」というイメージとのギャップに生徒たちは戸惑いを隠さなかった（笑）。「先生」とは言え、直接の利害関係が薄い私の前で、生徒たちはナチュラルな姿をたくさん見せてくれた。休み時間の過ごし方、授業中のノートの取り方、授業に集中できないでいた生徒がちょっとした言葉かけで集中を取り戻す姿など、これまで慌ただしい日常の中で見落としがちだった、生徒たちの「素の姿」を観察できたことはまたとない稀有な経験となった。実習校の先生方には快く授業を見せていただいたり、させていただいたり、生徒へのかかわりを許していただいたりしたこと心から感謝したい。春から戻る現場ではきっと一年前とは生徒の姿が大きく変わって見えるに違いない、と一年間の成果を実感しつつ気を引き締めて二年目を迎えたい。

小八重　智史（教科授業実践コース）

本実習は、実習受け入れ校と協議の上、学級配当は受けずに開始した。各実習のテーマに応じた実習となるよう心掛け、時期ごとに学級を中心とした観察等の実習や教科の授業を中心とした実習を実施した。週に1度の実習では、日々変化する学校のリズムに合わせることが難しく、教職員との関係作りや生徒との関係作りに苦労した。

また、年間を通して研究のための実践を心掛けた。1学期に学年全体の参観を重点的に実施し生徒理解に努め、2学期に教科の参観により教科の授業の進め方などの理解を進め、2学期末には授業を実践することが出来た。

本実習において、特に有用であったのは、同教科だけでなく他教科の授業参観を実施し

たことである。自分と異なるスタイルの授業を参観し、自分にはない良さに気づくとともに、学習が行われる空間を客観的に観ることで自分の授業への省察の機会となった。実習で学んだことを実践報告に活かすことができるよう、次年度も努力したい。

平間　ゆかり（教科授業実践コース）

学習活動における生徒同士の「かかわり」の充実を目指し、本実習に臨んだ。週１回の実習で、先生方や生徒達との関係を築くことは難しかったが、その中でも自ら「かかわる」ことで、様々なことを感じ学ぶことができた。特に、他教科の授業を参観し、生徒との対話を重視した指導は、大変参考になった。体育科の授業においては、生徒同士のかかわりを重視したマット運動の授業を、実習校の先生方と検討し実践した。仲間とかかわることの楽しさを味わい、それにより技能が向上したと感じることができた生徒が多く、場の設定や工夫により、生徒に変容が見られることが実感できた。本実習をベースとして、来年度の研究へつなげていきたい。また、本実習では、「教育」、「体育」とは何か、見つめ直すきっかけとなった。その本質を見失わず、今後の実践に臨みたい。最後に、このような実習の場を提供していただいた実習校やご指導いただいた先生方に大変感謝している。

学校教育実践実習４・５（各コース実践研究）

目標

学校教育にかかわる実践研究課題について、自ら立案した計画に沿って解決策を実践し、経験することで、学校におけるさまざまな課題に主体的に取り組むことのできる資質能力を培うこと。また、自ら実施した実践研究に基づいて「実践研究報告書」（最終レポート）を作成すること。

実習内容

受講生は、自らの実践研究課題を設定し、実践研究を中心とする実習を主体的に行うことが求められる。そのため、実践研究課題や研究計画等を記した実習計画書を作成し、計画に沿って積極的に実習を行い、実習終了段階では検証計画に基づき自らの実習を評価し、「実践研究報告書」（最終レポート）を作成する。

院生による学校教育実践実習４・５の報告

学校教育実践実習４～５は成果発表として報告されている。

教育実践と省察のコミュニティ 2015

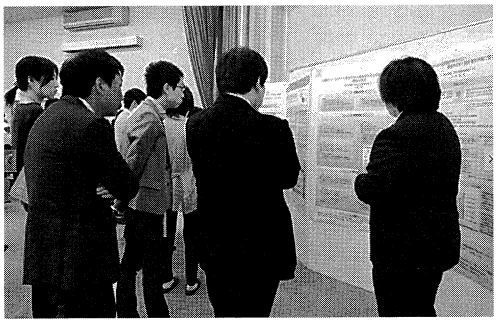
「子どもの学習意欲を高める授業とは」

平成 27 年 11 月 7 日に「教育実践と省察のコミュニティ」を開催した。今回は「子どもの学習意欲を高める授業とは」というテーマを設定し、このテーマを中心に講演とワークショップを行った。また、ポスターセッションにおいては各院生の実践実習の様子をまとめたものが発表され、それぞれの実践の姿を伝えていた。講演とワークショップは以下のようなものであった。この様子はニュースレターNo.13 によって報告されている。以下はニュースレターNo.13 からの抜粋である。

巻頭言より

教職大学院では、「子どもの学習意欲を高める授業とは」というテーマを設定し、“教育実践と省察のコミュニティ”を開催した。午前中のポスター発表に続き、午後からは福井大学大学院准教授の木村 優氏の基調講演と発創デザイン研究室代表の冨永 良史氏のワークショップが行われた。自ら課題設定を行い、研究と実践の往還によって課題解決を求められる教職大学院生にとって、極めて有意義な内容であり、今後の成長の糧になることを期待したい。

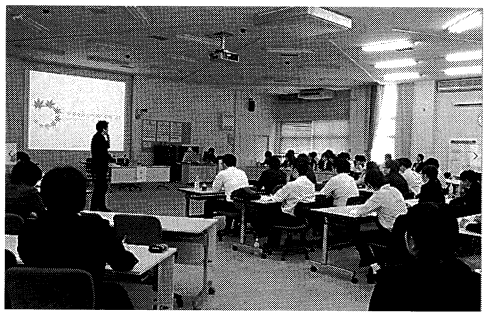
ポスターセッションの様子



ポスター発表では、教科や校種を問わず多くの人から質問やアドバイスをしていただいた。自分自身が研究してきたことを周囲に発信するだけでなく、他の院生の皆さんの研究についても話を聞くことにより、新たな視点で自分の研究を見つめ直すことができた。また、ポスター発表において活発な意見交換ができたことは、実践研究報告書の執筆に向けて大変有意義な機会となった。今回のポスター発表での学びをもとに、実りのある実践研究報告書になるように励んでいきたいと思う。

教科授業実践コース　宮崎　理沙

講演の様子



子どもの学習意欲を高めるために、教師はどのような授業をすれば良いだろうか。グループワークに参加し、議論できるような授業であれば、子どもは授業に挑戦意識をもち、楽しさを感じることができる。そこで子どもの学びの質を高めるために、教師は学習内容によって選択・判断できる能力が必要だと考えられる。そのための選択肢を多く持つことが学びの質の高い授業となり、子どもの学習意欲を高めることができるのではないか。

学級経営・授業実践開発コース　森　竜也

ワークショップの様子

このワークショップを通して私が感じたことは、「感覚を研ぎ澄まし、インスピレーションを鍛えることの重要性」である。授業では、教師が進行役(ファシリテーター)となって子どもたちと一緒に場を構築していく。子どもたちの学習意欲を高めるためには、安心できる雰囲気づくり、考えを深める問いやその順序の準備、臨機応変な対応力が必要となり、これらの力はインスピレーションの鍛錬によって獲得できる。このことを、実践を通して学ぶことができたので、今後の自分の実践研究に活かしていきたいと思う。

子ども理解・特別支援教育実践コース

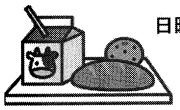
金原　亮介

クロスセッション2015

教職大学院ではコースごとにクロスセッションを行い、日頃の実践を聞きあい話し合いを行うことで、実習の在り方や研究の在り方を振り返る活動を行っている。

子ども理解・特別支援教育実践コース

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～10月　クロスセッション～



日時：10月30日（金）　18時
場所：210番教室

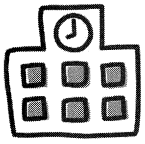
- 久我自生（くが みずき）　18：00～
  「心理的トレーニングが小学生の対人関係能力に及ぼす効果に関する実践的研究」
- 枦山ゆずる（はじやま ゆずる）　18：30～
  「小学校低学年における適応感のある学級づくりのための学級分析シートの作成と実践」
- 太田敦夫（おおた あつお）　19：00～
  「通常学級における授業を中断させない課題非従事行動の実態把握に関する研究」

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第2回　12月　クロスセッション～

日時：12月18日（金）　17時
場所：210番教室

- 青山友里（あおやま ゆり）　17：00～
  「知的障害がある生徒を対象とした援助要請行動の向上に関する考察」
- 寺川愛美（てらかわ まなみ）　17：30～
  「特別支援学校における自閉症児の社会性の育ちの獲得のための指導支援の実際～観察による要求言語行動の形成支援について～」
- 黒木美帆（くろき みほ）　18：00～
  「特別支援学校における自閉症スペクトラム障害のある生徒の自発的要求行動形成のための指導・支援法について」

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第3回　1月　クロスセッション～



日時：1月26日（火）　17時～
場所：210番教室

- 瀬戸崎千亜紀（せとざき　ちあき）　17：00～
  「小学校低学年において規範意識を育むための学級経営」
- 泉セシリア（いずみ　せしりあ）　17：30～
  「通常学級に在籍する気になる児童の実態把握・個別の指導計画と授業における視覚的教材の活用」
- 松本歩（まつもと あゆみ）　18：00～
  「児童の自立と協働を促す教員の支援の在り方
  ～通学合宿と学校教育を結びつける観点から～」
- 下田渚（しもだ　みぎわ）　18：30～
  「特別支援学校高等部（知的障害）における二次障害への教育的対応
  ～ストレスマネジメント、ＳＳＴを中心に～」

教育学研究科
子ども理解・特別支援教育実践コース
～第4回　2月　クロスセッション～

日時：2月15日（月）　17時～
場所：210番教室

- 山口栞奈（やまぐち かんな）　17：00～
  「英単語の綴り習得困難におけるリスク要因に応じた支援方法の検討
  ―文献研究を通して―」
- 金原亮介（かねはら りょうすけ）　17：30～
  「携帯メール依存度と孤独感との関連」
- 野崎徹（のさき とおる）　18：00～
  「すべての児童が居心地の良い学級となるための教師による支援段階に応じた効果的な支援の在り方についての検討」
- 山本実来（やまもと みく）　18：30～
  「自己肯定感の低下を防ぐための学級経営
  ―褒める活動を中心に―（仮）」

学級経営・授業実践開発コース

平成 27 年 10 月 19 日（月）

長崎大学大学院教育学研究科 教職実践専攻 学級経営・授業実践開発コース

平成 27 年度　第２回クロスセッションのご案内

●日時：10月23日（金）16時10～18時00分

●場所：教育学部　11番教室

― 話題提供者 ―

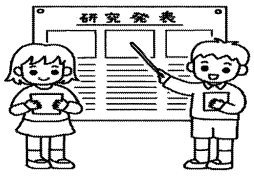
①3 年プログラム　M3　堀之内　利成さん
『授業実践に向けた特別活動の指導案検討』

②2 年プログラム　M2　川井田　大輔さん
『コミュニケーションの素地とは？？？』

③2 年プログラム　M2　前田　拓也さん
『生徒がタブレット PC を主体的に活用する授業デザインと実践』

④2 年プログラム　M2　舛元　崇史さん
『ことばの力とは？？？』

⑤2 年プログラム　M2　山下　志緒里さん
『複式学級における算数科授業の指導案検討』



文責
学級経営・授業実践開発コース
3年プログラム 3年　堀之内　利成

平成 27 年 12 月 14 日（月）

長崎大学大学院教育学研究科 教職実践専攻 学級経営・授業実践開発コース

平成 27 年度　第３回クロスセッションのご案内

●日時：１２月１８日（金）１８時００～１９時３０分

●場所：教育学部　11番教室

― 話題提供者 ―

① M1　水谷綾子（現職）
『指導に悩むケーススタディー』

② M2　高比良成厳（現職）
『実践研究に関すること（仮）』

③ M2　宮脇稔也
『実践報告書について』

④ M2　田中一浩（現職）
『実践研究に関すること（仮）』

⑤ M2　浅川紳二郎（現職）
『実践報告と院生に期待すること』

⑥ M2　松林朱音
『研究報告“自己肯定感について”』

文責
学級経営・授業実践開発コース
M1　笹本　健太

長崎大学大学院教育学研究科　学級経営・授業実践開発コース
H27年度　第4回　クロスセッションのご案内

日時：1月22日（金）16時30分～18時00分
場所：教育学部43番教室　　形式：ラウンドテーブル

ラウンドテーブルとは、少人数のグループでざっくばらんに議論を行うものです。
グループは、大学の先生方や現職の先生、院生学部生などを交え、構成します。

大学院でどのような研究が行われているのかに興味のある方、教育についてもっと知りたいという方をお待ちしています。
参加したい、興味があるという方は右のアドレスにご連絡ください。

話題提供者

M2　蘇娜
「小学校における平和意識を育てる授業に関する研究」
キーワード
小学校、平和教育

M1　益田　航平
「身近に感じる平和教育」
キーワード
小学校、平和教育、

M1　行成　功志
「実習2、実習3を通して」
キーワード
中学校、数学、

M2　森　竜也
「生徒が見通しを立てて問題を解決するためには」
キーワード
高校、数学、アブダクション、見通し

M1　山本　麟太郎
「校外学習を主体的な活動にするための授業デザイン」
キーワード
小学校、社会、ICT教材開発
主体的な学び

学級経営・授業実践開発コース
M1　笹本　健太
E-mail：kenken2198@gmail.com

成果発表

平成 28 年 2 月 20 日に「教育実践研究成果発表会」が行われた。今年度は３コースの体制になって初めての成果発表であるため発表者が２４名になり、長時間にわたる発表となった。次年度よりは２日に分けて行う予定であり、１日で行うこど成果発表は今年度が最後となる。

平成 27 年度長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻
「教育実践研究」成果発表会プログラム

「学校経営・教科授業実践コース３年プログラム」

1　堀之内　利成　　児童の自己表現力を育む授業づくりに関する研究
—自他尊重の態度を大切にした伝え合い活動に焦点を当てて—

「子ども理解・特別支援教育実践コース２年プログラム」

2　久我　自生　　心理的トレーニングが小学生の対人関係能力に及ぼす効果に関する実践研究

「学級経営・授業実践開発コース２年プログラム」

3　川井田　大輔　　外国語活動におけるコミュニケーション能力の素地を養うための授業づくり
—個への関わりと場の設定の工夫を通して—

4　前田　拓也　　中学校社会科における生徒がタブレット端末を主体的に
活用する授業デザインと実践

5　舛元　崇史　　「ことばの力」を育む外国語活動の授業研究

6　松林 朱音　　多様性の認め合いから自己肯定感を育む学習活動の在り方に関する実践研究
—中学校国語の授業を中心に—

7　宮脇 稔也　　子どもの持つ道徳的価値についての思考を深める道徳授業
—道徳授業資料の活用方法を問い直す—

8　山下　志緒里　　主体的に学習する児童を育てる複式学級の授業づくり
—間接指導での学び合いを取り入れた算数科授業を通して—

「教科授業実践コース２年プログラム」

9　川口　奈菜　　中学校における自立に関する生活スキル指導の実践研究
—家庭科教育を中心として—

10　近藤　賢　　科学的な思考力・表現力を育む理科授業の実践
—班での話し合い活動の改善を中心として—

11　篠原　昂太　　比較聴取を取り入れた歌唱授業の実践
—生徒自身が演奏の変化に気付く音楽科学習を目指して—

12　宮崎　理紗　　ＩＣＴ機器を効果的に取り入れた音声指導
—高等学校英語科の授業に焦点を当てて—

13　山﨑　敦子　　表現と鑑賞の関連を図った授業設計
—音楽の要素や仕組みを視点として—

14　山下　翼　　技術科の授業における主体性を意識した導入の効果

【現職教員学生による発表】

15　太田　敦夫　　通常学級における授業を中断させない
課題非従事行動の実態把握に関する研究

16　下田　渚　　特別支援学校高等部（知的障害）における二次障害への教育的対応
―ストレスマネジメント、SST を中心に―げｎ

17　枦山ゆずる　　小学校低学年における 学級不適応感のある子どもの
行動分析シートの作成と実践

18　高比良　成厳　　高校生における音読の効果の検証と効果的な音読指導のあり方について

19　田中　一浩　　確かな自分の考えをもち、主体的に学び合うことのできる授業作り

20　大町　謙悟　　「共感的な人間関係」の形成に基づく「楽しい体育授業」の追求
―話し合い活動を中心とした相互理解を目指して―

21　浅川　紳二郎　　児童の主体的な問題解決活動を目指す理科授業改善の試み

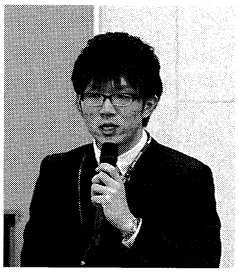
22　水谷　綾子　　「人間力」育成のためのキャリア教育
―学校全体で推進する「人間力」育成モデル―

23　出口　梨恵　　コミュニケーション能力の素地を養う小学校外国語活動のあり方
―ファシリテーションの要素を活かして―

24　林　隆広　　地域の史料を活用した歴史教育の展開
―長崎県の史跡等を素材とした高等学校日本史学習の場合―

成果発表者からの報告

1　堀之内　利成　　児童の自己表現力を育む授業づくりに関する研究
―自他尊重の態度を大切にした伝え合い活動に焦点を当てて―



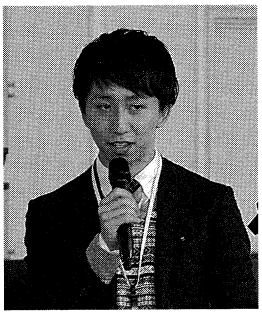
本実践研究では、児童の自己表現力を育む授業づくりについて検討することを目的とし、「自他尊重の態度」と「伝え合い活動」に焦点を当てて、特別活動と社会科における授業実践を行った。実践 1 では、自己表現スキルを習得する過程。実践 2 では、KJ 法を活用した伝え合い活動の中でスキルを活用する過程。実践 3 では、教科指導との関連を図る一試みとして社会科授業で実践する過程である。児童の学習活動の様子やワークシートならびに振り返りシートの記述内容の分析から、アサーション・トレーニングを実施したことで、相手の気持ちを考えて伝えるスキルの習得に繋がることが示唆された。また、アサーション・トレーニングと KJ 法を関連させた学習活動を展開することで、伝え合い活動の促しに寄与していることが示された。さらに、特別活動における学習内容は教科指導においても有効であると示唆された。本実践研究で得られた課題を、今後の実践の基盤にしたい。

2　久我　自生　　心理的トレーニングが小学生の対人関係能力に及ぼす効果に関する実践研究

本研究では、学校における児童の対人関係能力の育成とその向上を図るべく、心理的トレーニングを中心とした授業実践・活動実践を行い、問題行動の解決とより進んだコミュニケーション能力の発達に貢献し、活動を通して児童同士、児童と教師の間の人間関係構築を目指すことと、人間関係能力が向上されることで問題行動そのものを児童が起こさなくなるという学級づくりを目指す上での心理的トレーニングの有効性を明らかにすること、を目的としている。

実践内容としては、小学生を対象として複数回、数種類の心理的トレーニングを実施して分析・検証し、その結果、活動後の言動に変化が見られたが、対象とした学年・学級に合わせた説明と内容の吟味が必要であり、継続的に行えば短時間の活動でも十分に心理的トレーニングとしての効果が発揮されることが確認された。今後はより細かな活動の分析と効果の立証を続け、更なる効果的なトレーニングの開発を目指す。

3　川井田　大輔　　外国語活動におけるコミュニケーション能力の素地を養うための授業づくり
―個への関わりと場の設定の工夫を通して―



本実践研究では、児童の「コミュニケーション能力の素地」を養うための授業を検討することを目的とした。「コミュニケーション能力の素地」の一つとして「方略的能力」「情意的素地」を挙げ、その２つを重視するポイントとして「素材・話題そのものへの興味・関心」「異文化・自国の文化への気付き」「発見相手に伝えたい情報・思い」「相手から得たい情報・思い」を挙げた。その４つのポイントを「個への関わり」と「場の設定」の二つの工夫を取り入れながら授業実践を行った。質問紙調査・振り返りシート・授業のビデオの分析を行った結果、児童が自分から相手にコミュニケーションを取ろうとする様子や外国の文化に興味・関心を持つ様子が見られ、「コミュニケーション能力の素地」を養うことができた可能性があると示唆された。

4　前田　拓也　　中学校社会科における生徒がタブレット端末を主体的に活用する授業デザインと実践

本研究は中学校社会科におけるグループ活動に注目し、生徒が主体的に活動できるグループ活動を設定した授業をデザインし実践することで、生徒が主体的に活動できると考え研究を行った。

本研究では、生徒が主体的に活動できる２つの授業をデザイン・実践した。１つ目はジグソー法を取り入れた授業である。知識構成型ジグソー学習を参考に授業デザインし、生徒が視点に基づいて課題解決する授業を実践した。生徒の意見の表現に付箋を、意見の整理にタブレット端末を活用することで、生徒が持ち寄った情報を組み合わせて答えを導く場面で視点に基づいて情報を整理できた。

２つ目は調べ学習を取り入れた授業である。生徒が課題解決に必要な資料を自分たちで判断して集める際にタブレット端末を活用させ、集めた情報を組み合わせることで課題解決させた。生徒が教科書以外から情報を集める場面において、インターネットから必要な情報を自ら集めることができた。

２つの実践の各場面で生徒は主体的に活動できたと判断した。

5　舛元　崇史　　「ことばの力」を育む外国語活動の授業研究

私は「相手の立場を理解し、自分の考えや思いをことばで伝える子ども」に育って欲しいと願っている。そのために本実践研究では「ことばの力」を定義し、それを育む外国語活動の授業実践を行った。「ことばの力」は「言語を客体として、意識・観察・運用する力」と定義した。

授業実践では、研究に関わる内容として２つの場面を設定した。１つ目はあいさつをする場面である。会話を行う際に、その国の時間にあったあいさつから会話を始めるようにした。２つ目は選んだ言葉を使う場面である。会話を相手に伝わるように言葉を選びながら行うようにした。

「ことばの力」質問紙、文章産出課題「オカピ」、外国語活動に関する質問紙による評価結果によると、「ことばの力」を育むことには至らなかったことがいえる。しかし、「コミュニケーション志向」因子において授業前後では有意な上昇が見られたことから、測定の方法等で改善の余地があると考える。

6　松林 朱音　　多様性の認め合いから自己肯定感を育む学習活動の在り方に関する実践研究

―中学校国語の授業を中心に―

昨今、子どもの自己肯定感の低下が問題視されている。本実践研究では国語の授業を通して自己肯定感を高めるための手立てを模索した。本実践研究における自己肯定感は、自分なりの満足感と自己有用感を合わせたものとしてとらえている。そのような自己肯定感を高めるために、多様性の認め合いを重視した言語活動を取り入れた授業を行った。実践は、グループで話し合いながら一つの作品を作り上げたり、グループ内で発表をし、発表の良かったところを述べ合ったりといったグループ活動が中心である。活動の結果、話し合いで自分の意見が役に立ったことによる自己有用感、一人ひとりの意見が合わさったから良い作品ができたという多様性への気付き、発表をよく聞いてもらえた、認められたという感覚等を得られたようである。そこから自己肯定感が高まるきっかけとなった可能性が示唆された。今後は授業以外の場面でも自己肯定感を高める手立てを検討していきたい。

7　宮脇 稔也　　子どもの持つ道徳的価値についての思考を深める道徳授業

―道徳授業資料の活用方法を問い直す―

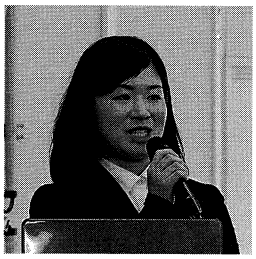
本実践研究は、既存の道徳授業資料の活用方法を、主に「ねらい」と「主発問」とに注目しながら批判的に検討してきた。そうした検討に基づき、子どもが既に持っている道徳的価値についての思考を深める道徳授業を、構想・実践することを試みた。そしてまた、授業実践を振り返るなかで、より善い授業、より子どもの思考を深める道徳授業を模索してきた。

本実践研究を通じて見えてきたことは、授業者自身の道徳的価値についての思考が深まっていなければ、子どもの思考を深めるに資するねらいや主発問を見出すことができないということである。

本実践研究で扱うことができた道徳的価値は３項目にすぎない。一部改正された学習指導要領には、全部で２２の道徳的価値の項目がある。この２２の道徳的価値それぞれに対する授業者自身の思考を深め続けることで、「子どもの持つ道徳的価値についての思考を深める道徳授業」の実現へ向かうことができるであろう。

8　山下　志緒里　　主体的に学習する児童を育てる複式学級の授業づくり

―間接指導での学び合いを取り入れた算数科授業を通して―



本実践研究では、複式学級の間接指導時に着目し、算数科授業において学び合いを意図的に設定することで、児童一人一人が自ら主体性を発揮する授業づくりについて検討を試みることを目的とした。学び合いを充実させるために、まず構成的グループエンカウンターのショートエクササイズを通して学級の雰囲気づくりを試みた。その後、算数科授業において、作業的な活動を取り入れ、その中に学び合いを設定した。また、見通しをもつ段階でのヒントの量を徐々に減らし、児童の自力解決のレベルを上げるようしくみ、振り返りシート、ビデオ分析、質問紙調査により効果を検証した。結果から、間接指導時において「学び合い」を設定することが大切であることが示唆された。複式学級において、間接指導時という教師の必然的にいない場ができることを利用して、学び合いを取り入れたことで、より自分たちで課題を解決しようという意識が芽生えたのではないかと考える。

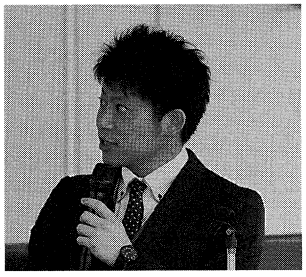
9　川口　奈菜　　中学校における自立に関する生活スキル指導の実践研究
―家庭科教育を中心として―

本実践研究では、生活の振り返りから生徒が自己を見つめ直す機会を作り、学校生活全般において自立の大切さに気付かせるとともに、実生活においても自分の身の回りことに積極的に取り組めるようになることをねらいとした。

中学生の自立に関する生活スキル（自分の身の回りことに対して積極的に取り組めるようになるための技術）指導の実践として、①授業実践、②生徒の実態把握のための観察を通した課題発見および指導を実施した。実践の結果、生徒は食べることに積極的であり、調理に関心をもっていることがわかった。しかし、自ら食品を選んだり、食事を作ったりする機会は少なく、食についての生活スキルについては改善の余地があるとわかった。また、生徒の生活スキルを向上させるためには、家庭との連携が重要であることが確認できた。この実践によって生徒が喜びや達成感を味わい、学校での学びと生活そのものとの結びつきを感じられたと思われる。

本実践研究で解明できた点は必ずしも多くはないが、家庭科教育によって生徒の生活スキルの向上に若干なりとも寄与できていれば幸いである。

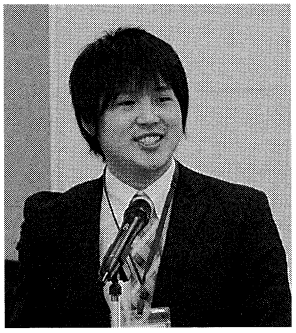
10　近藤　賢　　科学的な思考力・表現力を育む理科授業の実践
―班での話し合い活動の改善を中心として―



本研究では、科学的な思考力・表現力として、習得した科学的な言葉や概念を活用して課題を解決する力を、理科授業を通してすべての生徒に育むことを目的とした。その手立てとして、課題解決を図る授業において、話し合い活動を位置づけ、学力が均等となるように班を編成し、話し合い活動前にルーブリックを示した。

その結果、学級のほぼすべての生徒が課題を達成することができた。また、アンケート調査から、多くの生徒はルーブリックを肯定的に捉えていることがわかった。一方、班編成を変更したことについては、普段と変わらないという生徒と行いやすかったという生徒が同数であり、必ずしも肯定的に捉えていたわけではなかった。したがって、ルーブリックの活用と班編成を工夫することで、習得した科学的な言葉や概念を使って新たな課題を解決する力を、より多くの生徒に育むことは、課題は残されるものの、ある程度可能であると考えられる。

11　篠原　昂太　　比較聴取を取り入れた歌唱授業の実践
―生徒自身が演奏の変化に気付く音楽科学習を目指して―



本研究は、中学校音楽科における歌唱の活動において、生徒が成就感を得ることのできる授業を目指した。生徒が歌唱の活動で成就感を得るためには、自分たちの演奏が変化したことに気付くことが重要なのではないかと考えた。そのため、生徒自身に演奏の変化を気付かせる手立てとして、比較聴取を取り入れた。具体的には、自分たちの演奏の変化に気付かせるために、授業の最初と最後の演奏を録音したものを聴き比べさせたり、授業の目標であるねらいを明らかにするために教師の範唱を聴き比べさせたりした。

研究の結果、練習の前後に録音した自分たちの演奏を比較聴取することで、生徒は自分たちの演奏の変化に気付くことができた。また、ねらいに応じた複数の演奏を比較聴取することで、授業の目標であるねらいを明らかにすることができた。

今後も本研究を柱として、生徒が成就感を得ることのできる音楽科学習とは何か研究を行っていきたい。

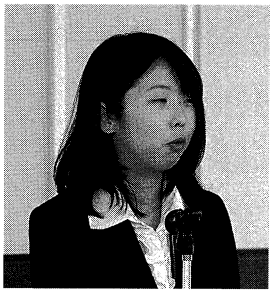
12　宮崎　理紗　　ＩＣＴ機器を効果的に取り入れた音声指導

—高等学校英語科の授業に焦点を当てて—

私は、ICT 機器を効果的に取り入れた音声指導というテーマのもと、高等学校にて実践研究を行った。英語でコミュニケーションを行う際に重要な基盤となる英語の音声に関する指導が十分に行われていない現状を踏まえ、英語が持つ強弱のリズムについての指導を実施した。その際には、音声の提示や録音などが容易にできる ICT 機器の特性を生かした上で、効果的に英語の音声事象の指導をするための方法について検討した。英語の音声に関する指導は、事前・事後録音の結果、一定の効果があったということが分かったが、指導期間や検証回数などの課題が残った。また、ICT 機器を活用することにより、音声の提示や視覚的な情報の提示などの面で従来とは異なる指導ができた。しかし、決して十分とは言えない ICT 機器の設置環境や教材作成にかかる手間や時間など今後検討していく必要がある。今回の実践研究で残った課題を解決できるよう、今後も研究を続けていきたい。

13　山﨑　敦子　　表現と鑑賞の関連を図った授業設計

—音楽の要素や仕組みを視点として—



小学校音楽科における表現と鑑賞の関連を図った授業を行い、内容に対する理解を深め、音楽的成長を実感できる授業を目指した。授業設計にあたり小学校学習指導要領解説を分析した結果、昭和 33 年に「表現」「鑑賞」の領域に整理され、昭和 43 年に学習内容である「基礎」が加えられた。以前から学びのある授業を追求していたことがわかった。分析を基に、実践Ⅰでは音色に視点を当て、表現につながる鑑賞の授業を実施した。実践Ⅱは、異なる 2 曲を用い、音の重なりに視点を当て歌唱と鑑賞の両方から学ぶ授業を設計した。児童に聴く視点や具体的な目標を与えたことで、「活動の楽しさ」「感じる楽しさ」に加え「わかる楽しさ」を味わうことのできた感想が見られ、学習意欲に影響を与えることが示唆された。知識を獲得することは、感性にも影響する。今後も「活動」だけではなく、児童が「わかって楽しい」と認識できる学びのある授業について研究を進めていきたい。

14　山下　翼　　技術科の授業における主体性を意識した導入の効果

技術分野では、主体的に課題を解決する力である「問題解決能力」の育成がねらいとされている。本実践研究では、橘田ら（2003）の提唱する「主体的な学習を進めるための内的条件」を満たすような手立てを授業冒頭の導入場面に取り入れることで、生徒の主体的な学習活動を促すことができると仮定した。仮説検証のためには、生徒の主体性を評価する方法について考案・実践し、主体性を意識した導入の効果を検証する必要がある。井上ら（2005）が研究によって抽出した主体性の 6 因子を参考に作成したチェックシートは、ある程度評価の妥当性があることを証明することができた。一方、生徒に記述させた授業の感想を比較すると、主体性を意識した導入を実践した学級の方が、積極的に課題を解決しようとする意欲や態度の読み取れる記述内容が多かった。このことから、主体性を意識した導入によって、生徒の主体的な学習活動を促すことができたということが示唆された。

15　太田　敦夫　　通常学級における授業を中断させない
課題非従事行動の実態把握に関する研究

本実践研究は「通常学級における授業を中断させない課題非従事行動」が不適応行動を起こす前のサインになる可能性があることを確認することを目的とした。授業を中断させない課題非従事行動の中で不適応行動を示す生徒の指標となりうる「これ」といった行動自体を見出すことはできなかったが、課題非従事行動自体が多いこと、また一部であるが、不適応行動を示す生徒の中に、他の生徒には見られないような課題非従事行動を示す生徒がいることが観察中に見られたことから、今後も課題非従事行動の観察を続け、結果を積み重ねることにより、不適応行動を示す前のサインを明らかにできるのではないかという手がかりを得ることはできた。そのため、今後もこの実践研究を積み重ねていきたいと考える。

16　下田　渚　　特別支援学校高等部（知的障害）における二次障害への教育的対応
―ストレスマネジメント、SST を中心に―

特別支援学校高等部（知的障害）に在籍する軽度知的障害のある生徒を対象に、二次障害の予防的対応として、「ストレスマネジメント」と「SST」を併せた包括的なプログラムを計画、実施した。実践にあたっては、まず対象生徒の障害特性と二次障害の状態像をアセスメントし、次に、一斉プログラム：「ストレスマネジメント授業」をメインプログラムとして、個別プログラムⅠ：「毎朝のセルフチェック」、個別プログラムⅡ：「個別 SST」という３つのプログラムを包括的に計画・実施した。支援プログラムの実施中、対象生徒は、比較的安定した情動を示し、二次障害が途中から顕在化した生徒はいなかった。また、二次障害の兆し（行動上の問題）が見られた生徒についても、行動問題は増加しなかった。実践をもとに総合的な考察を行った結果、特別支援学校高等部（知的障害）における二次障害の教育的対応について得られた示唆を報告した。

17　枦山ゆずる　　小学校低学年における 学級不適応感のある子どもの
行動分析シートの作成と実践

本研究は、幼稚園、保育園から小学校への移行期に困難さを抱える児童の増加傾向に着目し、小学校低学年の児童にとって適応感のある学級作りに効果的な対応の仕方と、児童理解に役立つ子どもの行動分析シートの作成と実践によりその有効性を探ることを目的とした。一年次は、1年生学級の観察結果分析を基に、効果的な対応をまとめ、行動分析シートの仮作成を行った。二年次は、2年生学級を担任しながら、指導方法を工夫し、分析シートの活用と改良を続け、分析シート簡略版の作成に至った。そして、分析シートの「引き継ぎ資料として／日常的児童理解への活用／長期的な子どもの実態把握への活用」以上３つの活用方法を提案し、分析シートによる、支援の優先順位や必要性の「見える化」を試みた。

児童の行動背景をできるだけ的確に、そして早期につかみ、対応に生かすためにも、この行動分析シートの活用や改良を今後も続け、児童理解の精度と指導力を上げていきたい。

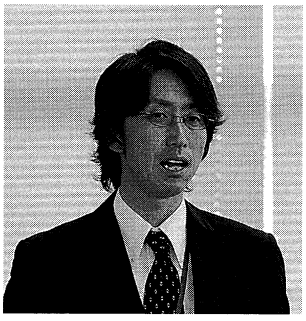
18　高比良　成厳　　高校生における音読の効果の検証と効果的な音読指導のあり方について

近年では急速な国際化を背景に、英語がコミュニケーションツールとして使えるために、諸技能を同時に伸ばすための技能統合型の授業が求められている。そこで、何か特別なことをするのではなく、普段から十分に英語を使う機会が生徒に与えられ、主体的に生徒が参加し、生徒の英語力を高める授業が音読活動を中心とした授業であると考え、その指導のあり方と効果について考察した。具体的には、教科書の内容を理解させた後、発表活動を前提にペアやグループを活用した音読活動中心の授業を実践した。検証結果としては、こうした実践は、授業内だけでなく家庭における意欲的な音読活動への取り組みにつながり、さらには、リーディングの力を伸ばすのに効果があること等が示唆された。課題としては、生徒が進んで取り組むような発表活動の工夫等があげられる。今回の取り組みで得られた成果を今後の実践に生かし、生徒の学力向上につなげていきたい。

19　田中　一浩　　確かな自分の考えをもち、主体的に学び合うことのできる授業作り

本実践研究では、特定の子のみが活躍し考えを深める授業に疑問を感じ、一人一人が主体となり展開される授業作りを行い、最終的には、学習における学び合いが一人一人の自己肯定感を育て、よりよい人間関係の構築につながる一歩になることを目指した。そこで、ＩＣＴや知識構成型ジグソー法を取り入れた学び合いを通して仲間との関わりの中で、子どもたち一人一人が意見を出し合いながら、様々な知識を統合し、思考を深め、答えを導き出す授業実践を行った。その結果、特定の子中心に展開される授業から一人一人が話したり聞いたりする学び合い活動のできる子ども中心の授業作りに転換できた。自己否定の多くの子がＩＣＴや知識構成型ジグソー法を取り入れた学び合い活動を通して自己肯定へ変化することができ、自分に自信がついた。本実践研究を今後の学校現場で生かして頑張っていきたい。

20　大町　謙悟　　「共感的な人間関係」の形成に基づく「楽しい体育授業」の追求
―話し合い活動を中心とした相互理解を目指して―



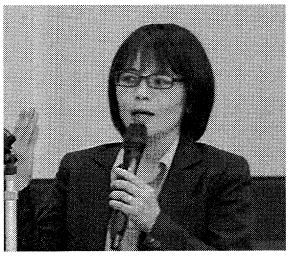
体育授業における今日的課題には、集団生活及び仲間とかかわり合う資質の低下、運動を楽しむために自ら考え、工夫する力の低下などが示されている。そこで本研究では、異学年による合同授業において、生徒の主体的な話し合い活動を手段として位置付け、技能目標の達成を目指す過程で、共感的な人間関係を育み、全ての生徒が満足感と楽しさを実感できる体育授業の実現を目的とした。研究の結果、目標を意識した話し合い活動を充実させることで、相互の受容や尊重、理解を通して共感的な人間関係が形成され、生徒は、互いに認め合い、頼り合いながら体育目標の達成を目指して主体的に取り組むことができた。このようなことから、技能パフォーマンスの確実なる獲得を今後の課題とし、体育授業において話し合い活動を充実させることは、「満足感・楽しさ」を目指すひとつの手段として、一定の有効性を認めることができた。

21　浅川　紳二郎　　児童の主体的な問題解決活動を目指す理科授業改善の試み

今回の大学院派遣研修において多くのことを学ばせていただきました。１年目は大学院での理論研究。学校現場では学ぶことのできないところまで深く、調べることができました。２年目の学校現場との両立とても大変なものがありました。しかし、我々教師は、実践家であり、理論家や評論家ではありません。毎日、児童と向き合い何が良くて、何が悪かったのか毎日研究しなくてはいけません。そのことがすぐに生きることもあれば、何年後かもしれません。今回は、理科授業の改善と試みと題して研究いたしましたが、よく耳にする“理科離れ”とは誰を指しているのでしょうか？児童生徒は理科授業は大好きです。次の学習指導要領でアクティブ・ラーニングが目玉として取り入れますが、理科学習はまさにそれを担う教科ではないかと私は考えています。

22　水谷　綾子　　「人間力」育成のためのキャリア教育

—学校全体で推進する「人間力」育成モデル—



本研究では、キャリア教育を通して育成すべきとされる「基礎的・汎用的能力」をもとに４つの能力を「人間力」として示し、「能力（『人間力』）育成の視点からキャリア教育をとらえ直し、学校全体で推進するために教職員の意識を高める」ための取組を研究した。特に、学校教育活動のそれぞれの領域における「人間力（４つの能力）」育成との関連性を重視した。おもな実践として、実習校や勤務校において、学校全体で推進するキャリア教育のあり方について共通理解をはかるための職員研修と教職員の意識調査を実施した。特に勤務校においては「『人間力』育成のためのキャリア教育」推進リーフレットを作成し、教職員に対して日頃の教育活動と「人間力」育成との関連を教科や分掌などの領域ごとに調査した結果をもとにより実践的な「『人間力』育成モデル」を再構成した。
今後「人間力」育成のためのキャリア教育推進によって生徒がどのように成長したのかという評価方法の確立など、多くの実践課題に継続して取り組んでいきたい。

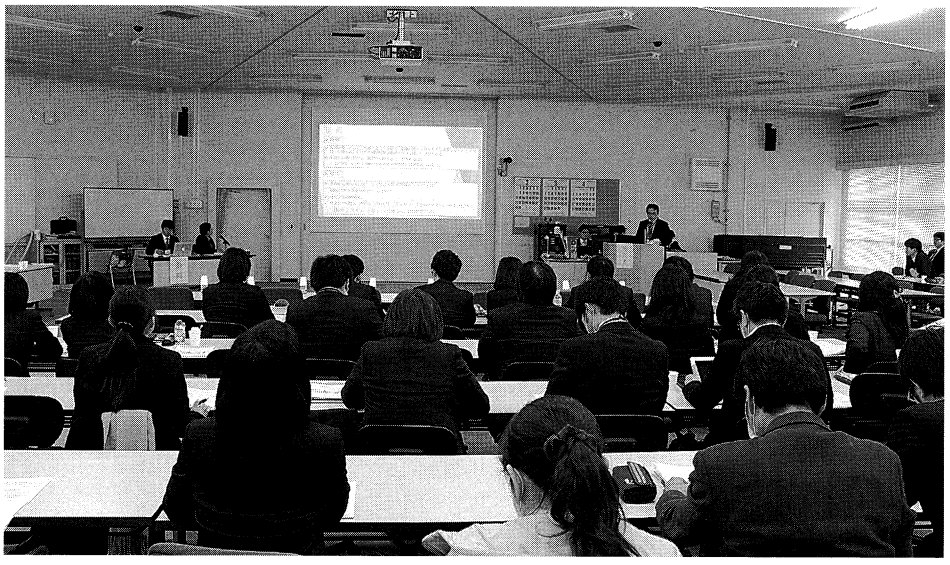
23　出口　梨恵　　コミュニケーション能力の素地を養う小学校外国語活動のあり方

—ファシリテーションの要素を活かして—

2020年度より小学校３・４年生の外国語活動の開始、及び５・６年生の外国語活動教科化が完全実施となる。私たちは「外国語をどうやって教えるか」という方法論的なものに目が向きがちになるが、基本となる学習指導要領の目標にある「コミュニケーション能力の素地」をきちんと捉えて外国語を教えるということが必要であると考えた。そこで、コミュニケーション能力を「伝え合い、協働し問題解決に取り組むことができる力」とし、その能力を育むため「情報ギャップ」「ファシリテーション」を授業に取り入れ実践研究を行った。この２つを取り入れた授業では、児童が自分の意見や考えを積極的に伝え合いコミュニケーションを図っており、その能力の素地を養う一側面として有効であるという成果を得た。一方、具体的な活動場面を設定することが難しいなどの課題が明らかになったので、今後さらに研究を深めていく予定である。

24　林　隆広　　地域の史料を活用した歴史教育の展開

—長崎県の史跡等を素材とした高等学校日本史学習の場合—

本実践研究は地域の史料を活用した「地域史テーマ学習」の有用性について研究したものである。その際、日本史B（高等学校地理歴史科）を対象とするとともに、長崎県における史跡や文献などの史料を授業開発の素材とすることとした。また本実践研究を効果的に推進するために、既存の知識を活用して生徒が自ら考え話し合い、発表する言語活動を多く取り入れた「アクティブラーニング（協同的主題探究学習）」を採用した。さらには、このような授業開発を通して「学び続ける教師」の実践も行うことができ、城郭研究においては新たな発見を通して地域史研究に貢献することができた。実施した研究授業では生徒の興味や関心を引き出すことに成功するとともに、歴史的思考力の育成を促進することができた。またタブレットPCを活用した授業や、長崎歴史文化博物館との遠隔授業（ビデオ会議形式）など、先駆的な授業モデルを提示することもできた。文化財保護行政（遺跡の発掘調査など）に長く出向した経験があり、そこで得た知識や技術を学校現場に還元できないか長く考えてきたが、このような実践研究を行うことができ、大変嬉しく思う。

成果発表会の様子